

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏 名 ^{あらい ゆうき} 荒井 裕樹

本論は、ハンセン病、脳性麻痺患者らがその文学活動を通し、自らの内面をいかに表現したのか、というその自己表象を分析することによって、社会の抑圧構造、ならびに彼らがそれらとの戦いを通して生存権を獲得していこうとするプロセスを、歴史的社会的に明らかにしたものである。

構成はハンセン病を対象にした第Ⅰ部と脳性麻痺患者を対象とした第Ⅱ部とからなる。

第Ⅰ部の前半では、大正・戦前昭和期において「癩予防協会」が患者から募集した文学作品の分析を通し、当時の隔離政策が患者にいかなる自己認識を強いたのかが明らかにされている。また、ハンセン病作家として著名な北條民雄の日記と、代表作『いのちの初夜』（1936年）の分析を通し、北條にあって当時の「文学」概念が過酷な現実から逃避するための隠れ蓑にされていく陥穽が明らかにされている。療養所の実態に関する詳細な調査をもとに、隔離政策の本質を見通すことのできなかった当時の文学状況の限界を明らかにしたくんだり、これまで実存的な主題が高く評価されてきた『いのちの初夜』への再評価を迫るものとして注目に値する。

第Ⅰ部の後半では、「救癩」の担い手として貞明皇后が称揚されていく政治的な背景、さらにハンセン病患者を扱ってベストセラーになった小川正子『小島の春』（1938年）に内在する問題点、ハンセン病患者が第二次大戦下、療養所内で出していた同人誌の詩作に〈銃後〉の論理が先鋭に表出されている様相などが分析されている。これらはいずれも自らの生命を見出そうとする自己表現が、結果的に戦時の家族国家論的なヒエラルキーをより先鋭になぞってしまう悲劇を明らかにしたもので、戦前期の日本人の精神構造を障害者の視点から浮き彫りにしたものとして注目に値する。

第Ⅱ部は、1950～70年代を主な対象に、高度経済成長下の社会において、脳性麻痺患者が自らの言語表現を通して社会のひずみをいかに表象し、またこれと戦ったかが明らかにされている。主要な対象は文芸誌「しのめ」と、これを母胎にした「日本脳性マヒ者協会青い芝の会」の運動である。在宅障害者が家族から受ける精神的な抑圧に対し、「安楽死」という概念を通して逆説的に自らの主体性を獲得しようとした道筋、また詩人であり、運動家でもある横田弘が私的領域を求める戦いとして「障害者エゴイズム」を選びとっていくプロセスが、彼の詩作に「母」がいかに表象されるかという分析を通して明らかにされている。関係者への丹念な取材調査をもとに、戦後の「優生思想」のはらむ構造的な問題点を明らかにしていく論旨は傾聴に値するものである。

以上のように本論は、文学研究に出發しながら、障害学、社会福祉学、社会学に於けるマイノリティ研究等、多くの領域に関わる学際的な内容を備えている。それゆえに特定領域のプリンシプルに基づく評価を超えた多義性を孕んでいるが、当事者の言語的な葛藤の分析を通して文学研究と社会学・障害学との融合をはかり、あらたな学問ジャンルを切り開いていこうとする意欲は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。